慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代日本語における格助詞「より」の多義性の統一的説明の試み
Sub Title	Analyse unitaire de la polysémie de la particule casuelle yori en japonais contemporain
Author	芦野, 文武(Ashino, Fumitake) 伊藤, 達也(Ito, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.38 (2023.) ,p.41- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20230630-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代日本語における格助詞「より」の多義性の統一的説明の試み

芦野文武／伊藤達也

0．導入[1]

本稿は現代日本語の格助詞「より」の意味的多様性に通底する不変性を抽出し，その意味的不変性がどのようにして個々の発話の中で多様な意味を生み出すのかに統一的説明を与えることを目的とする。

まず，格助詞「より」の意味の多様性を摑むために辞書の記述を見てみよう。『明鏡国語辞典』（以下『明鏡』と略記）は全部で７つの用法を区別している。以下，『明鏡』からそれぞれの用法と，その例文を１つずつ引用する。なお，③～⑥の用法について，『明鏡』は「「から」よりも改まった言い方」としている。

①【比較の基準を表す】
新幹線の方が飛行機より安い。

②【〈選択するものを並べて〉他と比べて退けられる物事を示す】
薬を飲むより運動しろ。

---

(1) 本稿は，2022年度，慶應義塾大学学事振興資金（個人）の補助を受けて行われた研究成果の一部である。

③【範囲を定める基準点を表す】
これより先は立ち入り禁止だ。

④【起点となる時間を表す】
会議は三時より開始する。

⑤【起点や通過点となる場所を表す】
横浜港より出航した。

⑥【〈方向性のある表現を伴って〉動作を起こす主体を表す】
山田様より電話がありました。

⑦【「…より（ほかに）の形で下に打消しを伴って」それしかないと限定する意を表す】
あきらめるより仕方ない。

以上の７用法に加え『明鏡』は，副詞としての「より」（「それ以上に。もっと。」）を挙げている[2]。
［副詞］より高く跳ぶ。

この「副詞用法」も，助詞「より」からの派生と考えられている（cf.『明鏡』）ことから，格助詞「より」の多義性の一部として扱うことにする。
上記の例文が示すように，「より」には様々な用法があるが，本稿ではこれを，「比較」，「選択」，「起点」という３つの用法に分類して議論を進める。本稿の目的は，このような多様な意味に通底する「より」の不変的

(2) 『明鏡』は副詞の「より」について，「もともとは欧文の比較級を訳すために案出されたもの」と説明している。近代以降の派生用法であるが，現代語において頻出する。

機能を抽出しようとする試みである。

以下，先行研究を概観したのちに，仮説を提示し，「より」の用法を，「より」が関係づける２つのタームの間のステータスの違いに基づいて，大きく２つに区別して記述する。

１．先行研究

格助詞「より」は多くの先行研究の対象になっているが，すべて通時的研究である。「より」の機能については，中世後期以降，「から」によって置き換えられたということが多くの研究で指摘されている（cf. 我妻（1968）ほか）。しかし，現代語における用例を見ると，「から」は確かに起点用法では「より」に置き換わったが，「比較の基準」，「選択」，「限定」などの用法では置き換わっていないことも分かる。すなわち「より」はその機能の全てを「から」に譲り渡した訳ではなく，固有の多様性を保持しながら現代日本語の中でも生き延びているのである。

また，通時研究では，「より」の「起点」と「比較の基準」のという２つの意味が上代から共存していたことも指摘されている（cf. *Ibid.*）。しかし，先行研究ではこの２つの意味の間の関係は十分に考察されていない。

本稿では「より」が上代から持ち，現代まで使用され続けている「起点」と「比較の基準」の用法の間には，１つの共通の操作があることを指摘する。

２．「より」の仮説

発話意味論の立場から，格助詞を扱った拙論（cf. 芦野・伊藤 2019；2022a；2022b）に沿う形式で「より」の仮説を提案する。まず格助詞全般に共通する統辞的図式として「より」は２つのタームの間の関係づけを行うことを前提とし，「より」が標示するタームをＸ，それと関係づけられるもう１つのタームをＹとする。２つのタームＸとＹについて，「より」は次の操作をマークするという仮説を立てる。

「X より Y」の形式において，「より」は，X を，Y によって越えられるタームとして規定する。

以下この仮説に補足コメントを加える。

―例えば，「太郎は次郎より背が高い」（比較用法）においては，X は格助詞「より」が標示するターム「次郎」に，Y は「太郎は背が高い」という述定関係の中の要素「太郎」に相当する。「より」は，背が高いという特性の度合いにおいて X：「次郎」が Y：「太郎」により越えられたことをマークしている。

―他方，Y は様々な意味において X を超越[3]するタームであることはすべての用例において共通しているが，X と Y のステータスは用例により異なる。本稿では，X と Y が共に，ある述語の補語になりうるケース（X と Y は共に述語の補語），X が補語，Y が述語であるケースの 2 つを区別する。前者において，X と Y は，ある述語の補語になりうるタームとして競合関係にあり，その意味で統語的には同じレヴェルにあるが，後者においては，X と Y はそれぞれ補語と述語という別々のレヴェルにある。例えば，「花子は，私より太郎を選んだ」においては，X（「私」）と Y（「太郎」）は，述語（「選んだ」）に対して，共にヲ格で標示された「対象」の意味役割を満たしうる，競合するタームである。それに対して，「船が横浜港より出航する」においては，X（「横浜港」）は，述語（「出航する」）に対して，「起点」という意味役割を標示する。以下，前者のケースとして「比較」・「選択」用法，後者のケースとして「起点」用法を分析し，それぞれの用法において，「Y による X の超越」がどのように解釈されるかを明示する[4]。

---

(3) 本稿では，以下，「超越」を，「はるかに越える」という意味ではなく，「越える」の名詞化した形として用いる。

(4) これら 3 つの「より」の用法は多くの辞書で「格助詞」として分類されている。「格助詞」は，述語（Y）との関係において，それが標示するターム X に固有の「意味役割」を付与するという機能を持つと言えるが，この定義に従え

3．「比較」・「選択」の用法

これらの用法は，X と Y が統語的に同じレヴェルにある要素として，「比較されうる要素」，「選択肢」というクラスを作っているケースである。

3.1．「比較」の用法

「より」は典型的に比較構文に現れるが，日文研（2009：152）はこの構文を「事物が持つ性質について述べる場合に，１つの事物がどのような性質をもっているのかを述べるのではなく，複数の要素を比べて，その性質をどちらが多く持っているのかを表すものである」と規定している。これは比較構文という構文全体の解釈であるが，その中で「より」自体はどのような機能を担っているのだろうか[5]。

本稿の仮説に基づくと，「より」が「比較」の解釈を構築するのは，２つのタームが与えられ，「より」が標示する X が Y によって越えられるということによる。つまりそれは，ある特性に関して，Y が持つ特性の度合いが，X が持つ特性の度合いを越えるということに他ならない。この意味で「より」は X を Y によって越えられるタームと規定しているのである。

（１）　今年は例年より桜の開花が早い。（日文研 2009：154）

ば，「より」の「起点」用法のみがそれにあたるだろう。「日文研」は「格助詞」の「より」としては「起点」用法のみを挙げ，「比較」用法・「選択」用法はそれに含めず別個に扱っている。また，小柳（2011）は，古代の助詞ヨリ類（ヨリ・ヨ・ユリ・ユ）の様々な用法の中に，格助詞と副詞性接尾語の２つを区別している（「比較」は後者とみなされる）。ただし，本稿では「より」のカテゴリーを越えた不変要素としての操作を抽出することが目的の１つであるため，３つの用法の共通点を探る方針を採用しており，便宜的に「格助詞」というラベルを採用しておく。

(5)　比較は様々な「ストラテジー」（cf. 八亀 2014）によって表され，「より」はそのうちの１つに過ぎないため，この助詞がどのように比較の意味と関わるのかを明示する必要がある。「X は Y に勝る」，「X は Y ほど～でない」などの，格助詞「に」や「ほど」＋否定などとの差異も今後分析する必要がある。

（2） 古着でもないよりはましだ。（『明鏡』）

例（1）では2つのターム「今年」と「例年」の比較が問題になっている。「より」が標示するX：「例年」は比較の基準となるタームであるが，Y：「今年」により，「桜の開花の早さ」という特性の度合いの点で「越えられる」タームである。比較の結果，Yは優勢，Xは劣勢に置かれる[6]。

例（2）で述語に含まれる「まし」（「増し」＝形容動詞）は「ほかより少しはまさっているさま」（cf.『明鏡』）を意味し，「まし」自体が「望ましさ」における比較を表していると考えられる[7]。この例におけるX：「ない」，つまり「古着さえ持っていないこと」（＝越えられる基準）は，Y：「古着」と比べ，「望ましさ」の観点から考えると劣るということである。つまり「古着」の方が「ない」より少しまさっている，そこから「古着でも着るものが何もないことと比べれば少しだけよい」という解釈が生じる。

この用法における「XよりY」は，原則的に「Xに比べてY」という言い換えが成り立つ。

以下，「比較」用法と類似するメカニズムを持つと考えられる2つの個別ケース（3.1.1. 副詞用法，3.1.2. 最上級用法）を記述する。

3.1.1. 「より」の副詞用法

副詞用法は助詞から派生した用法であるが，以下の例におけるように「より」の比較の意味を維持している。

---

(6) 述語がマイナスのベクトルを持つ比較の場合（例：「今年は例年より桜の開花が遅い」）においてもXが「越えられるターム」という関係は成り立つ。X：「例年（の桜の開花の遅さ）」は比較においてY：「今年（の桜の開花の遅さ）」に越えられている。いずれの場合も比較用法ではXは越えられるために引き合いに出される劣勢のタームである。

(7) 「まし」が「望ましさ」を表す比較の例として，cf.「もう少しましな暮らしがしたい。」（『明鏡』）

（3）　<u>より</u>よい方法を考える。（作例）

この例では，X（明示されていないが，話題になっている「方法」）の「よさ」に関して，考えるべき方法がYである。よりよい方法とは，まだ考えついていないが，既存の方法を「越えて／上回って」優れた方法のことである。

3.1.2.「より」の最上級的用法

比較の「より」は，以下のような場合，最上級の解釈を帯びることがある。

（4）　太郎<u>より</u>できる人はいない。（作例）
（5）　A：先日退院しました。　B：それは何<u>より</u>ですね。（作例）

（4）では，Xが「太郎」，Yが「できる人（のクラス）」に相当する。「太郎」を越えて「優秀な人のクラス」を「いない」によって否定することにより「太郎」を最上に優秀な人と述べている[8]。この用法の「より」は，「以上に」，「ほど」などで言い換え可能である。

（5）においても，「何より」は，比較を活用しながら，「何」で表される「全て」を乗り越えられる比較の基準とすることで，「退院」に「全てを越えたもの」＝「最良」の価値づけを与えている[9]。この場合，（4）と異なり否定は含まれていないが，「何」という特殊な語彙が表しているものを理解することが重要である。「より」に先行する「何」は疑問詞ではなく，この場合「ありうる全ての出来事」という仮想的な集合を表して

(8)　類例として，cf.「私は鶏肉がほかのどの肉<u>より</u>も好きだ。」（日文研 2009：152）

(9)　ただし，「君は何<u>より</u>もまず，フランス語を勉強しなさい」（作例）のような例では，「何より」は，他のあらゆることに優先してフランス語を勉強するという解釈を持ち，以下で見る「選択」の用法に分類されると考えられる。

いる。つまりこの例が意味するのは，Y「退院」は考えられるあらゆる出来事を「越えて／上回って」望ましいということであり，結果として意味的には最上級の解釈が生じる。

3.2. 「選択」の用法

日文研は「比較構文」が，「選ぶ」，「選択する」，「とる」のような動詞と現れると「単に2つの要素を比較するのではなく，そのうちの1つを選択するという意味を持つことがある」（日文研 2009：154）としており，「比較」用法と「選択」用法の類似性を指摘している。（ただし，以下で見るように，このような動詞が無い場合でも「より」が「選択」の解釈を構築する場合がある。）

いずれにせよ，「比較」と「選択」の意味は，2つのタームの間の関係性を問題にするという点で類似しているが，どのような条件において「より」が「選択」の解釈を構築するのか，そして，「比較」とは何が異なるのかを明らかにする必要がある。

「比較」用法では，XとYはある特性の度合いにおいて競合する2つのタームであり，Yの度合いがXの度合いを上回るということが「より」が持つ「超越」の操作であった。

ここで分析する「選択」の用法では，主としてXとYは相互に排他的な関係にある2つのターム[10]に相当すると考えることができる。この用法では，これらのタームのうち，発話者がYをXに優先すべきタームと判断し，Yを選択する（または共発話者にYを選択させる）ことを表すと考えられる。それによって，結果としてXは排除される（その実現の可能性は消えることになる）[11]。

---

(10) 文脈によって，タームは「行為」や「表現」など，様々な解釈を受ける。

(11) 結果としてXが排除されるということが，「選択」用法と「比較」用法との大きな違いであろう。後者においては，Xが排除されるという問題系は生じない。

したがってこの用法では「より」がマークする「超越」の操作は，Ｙを X に優先させることを意味する。また，この用法では Y が「選択」されるという点が特徴となるが，この場合「選択」が文中の動詞からもたらされるか（3.2.1.），命令・提案によりもたらされるか（3.2.2.），により２つのタイプを区別できる[12]。

3.2.1.　文中の動詞が「選択」の意味を表すタイプ

「選ぶ」や「選択する」などの，それ自体が「選択」の意味を持つ動詞[13]が現れる場合，「選択」という意味は既にこれらの動詞によって構築されているため，それと共起する「より」は，「選択」という解釈に対して補助的な役割を担っていると考えられる。つまり，この用法における「より」が標示する X は，最終的に選択された Y が，何に優先して選択されたかを明示していると考えられる。X はその意味で，取り消されるべき選択肢として，引き合いに出されているのである。

（６）　私は学校の近くに下宿するよりも，２時間かけて通う方を選んだ。（日文研 2009：154）

（７）　花より団子。（ことわざ）

（６）では，「選ぶ」という動詞により，Ｙ（「２時間かけて通う」）が選択されたという解釈が成り立っているが，「より」は X（「学校の近くに下

⑿　一般的に「比較」の「より」は「に比べて」とパラフレーズされることが多いのに対し，「選択」の「より」は「～ではなく」「むしろ」などと前項の否定を表す表現でパラフレーズできることにも両者の特徴の違いが表れていると言えるだろう。それぞれの例で言い換えられる単語が違うということは，それぞれの例で構築されている意味が違うということである。言い換えられる言葉を比べることで構築される意味を比較することができる。

⒀　ほかにも「採用する」，「採択する」，「好む」なども同様の意味を持つと考えられる。

宿する」）を，この選択において，Ｙと競合するターム（Ｙと同じレヴェルにある選択肢）として規定することで，何がＹに優先を譲るタームであるのかを明示していると言える。

（７）では，Ｘが「花」，Ｙが「団子」に相当し，このうちＹが優先されている。文中に動詞は明示されていないが，「選ぶ」「取る」などの意図的な選択を意味する動詞が想定される。

3.2.2.　命令・提案が「選択」をもたらすタイプ

このタイプの用例で観察されるＹの「選択」という解釈は，「より」がもたらす「超越」と，主体間関係に関わる文のモダリティ形式（命令・提案）の相互作用から生じていると考えられる。「命令」や「提案」は，拘束力において程度の差はあるにしろ，発話者が共発話者に，ある行為の実行を要請することだと考えられるが，「より」がＸを導入することで，ＸはＹとともに「実行すべき行為」のクラスの要素となる。「より」はＸの超越（Ｘの非優先）をマークするため，最終的にＹが実行すべき行為として選択されるという解釈が生じる。Ｘの選択の可能性ははそれと同時に排除されることとなる。

（８）　薬を飲むより運動しろ。（『明鏡』）
（９）　それよりご飯にしない？（『明鏡』）

（８）では，命令というモダリティ形式によって，発話者は共発話者に，Ｙ（「運動すること」）の実行を強く要請するが，それは「より」が標示するＸ（「薬を飲むこと」）に優先して実行されるべきであることと解釈される。背景にある文脈としては，例えば，健康を保つためには何をすべきかという問題に関して，Ｙが実行にふさわしい行為であるにも拘わらず，共発話者がＸを実行していて／しようとして，Ｙを実行しないという状況が考えられる。発話者はこの状況に苛立ち，共発話者にＹを優先して実

行することを選択するように要請し，X を放棄させようとしているのである。

提案の形式を持つ（9）では，共発話者が X にあたる「それ」（例えば，「議論の提案」，「コーヒー休憩の提案」）を実行しようとしているのに対し，発話者は Y「ご飯にすること」の方を優先して実行することを提案している。

3.2.3.　メタ的使用

「より」は以下のようなメタ的使用を持つが，これも「選択」用法として分析することが可能である。それはある事態を表明する際に用いる 2 つの表現について，発話者が，適合性の観点から，表現 Y の使用を表現 X のそれに優先（cf.「より」）させ，表現 Y を「選択」するからである[14]。この例でも「表現」Y の選択は「表現」X の排除を引き起こす。

（10）　私は山本さんの気遣いをありがたいと思うより，負担に感じた。（日文研 2009：155）

（11）　これは食事というより鳥の餌だ。（作例）

（10）では，「山本さんの気遣い」の受け取り方に関して，発話者がそれを表明するために用いる，表現の適切さが問題になる。「私」は「ありがたいと思う」（X）という表現ではなく，「負担に感じる」（Y）という表現の方を選択しているのである。

（11）では，「という」があることにより，X と Y が「表現の仕方」であると解釈される。発話者は，「これ」（例えば，「提供された食事」）に関

⑭　このケースは，2 つの表現について，その適合性の度合いを「比較」するケースとも考えられなくもないが，最終的には主体が表現 Y を選択し，それと同時に表現 X を排除していると言う意味で，また，これらの例文では，比較をパラフレーズするのに使われる「に比べて」は不自然で，「のではなくむしろ」で言い換えられるという点で，本稿では暫定的に「選択」用法としている。

して，Y：「鳥の餌」という言い方を選択することによって，X（「人間が食べるもの」という意味での「食事」）を，提供された食事を形容しうる表現として拒否しているのである。したがって，この例文の解釈は，実質的に「これは食事という名に値しない」というのに近い。

3.3. 「より」と「限定」の意味効果

「より」が，述部に否定を伴った「X よりほか（Y）」という形式をとるとき，「X 以外には何もない」という「限定」の解釈が生じる（cf. 冒頭の『明鏡』の用例⑦）。この解釈が生じるメカニズムは次のように考えることができるだろう。

このタイプの用法では，問題となる「行われるべき行為」や「持ちうる特性」に関して，一方で，「より」は X を，越えられるタームとして規定するが，他方で，述部の否定により，それを越えるターム Y（＝「ほか」）が排除されることになる。ここで，「X が越えられる」というのは，X の補集合を Y として構築し，それを否定によって排除することであると考えられる[15]。

結果として，X が当該の行為を行う／特性を満たす唯一のターム，もしくは当該の行為を行う／特性を満たすターム が X に限定されるということになる。

以上の説明からわかるように，この「限定」の解釈においては，「より」と「否定」が組み合わさることで，「選択」用法の場合とは逆に，X ではなく，Y が排除されるという結果になっている。

(12)　歌<u>より</u>ほかに能力がない。（『明鏡』）

---

[15]　Y が X の補集合であるということは，X と Y が表裏の関係にあることを意味する。すなわち，Y が否定されるということは，X を肯定することと同じである。「限定」の用法において，X と Y が集合／補集合の関係にあるということは，X と Y が互いに排他的関係にあることと同じであり，その意味で，この用法は「選択」用法と類似していると考えることができる。

(13)　あきらめるより仕方ない。(『明鏡』)

(14)　手術するより手はない。(『明鏡』)

(12) では，X は「歌」，Y は「ほか（歌以外のこと)」にあたり，「歌以外には何もできない」「歌の能力だけがある」を意味している。この例では，能力に関して，X：「歌」は，その補集合である Y：「ほか（歌以外のこと)」を構築する（cf.「より」）が，それが述部の「ない」で否定されることで，結果として，能力の集合の要素が歌に限定される（歌だけが能力と呼べる特性を満たす）ことになる。

「ほか」や「以外」が明示されていない (13) および (14) でも，解釈上は，「あきらめるより（ほか）仕方ない」，「手術するより（ほかに）手はない」とみなすことができ，(12) と同様の分析が可能である。

4．「起点」の用法

最後に，「より」の「起点」用法をいくつかの例とともにごく簡潔に考察する[16]。

2．で述べたように，「比較」，「選択」の用法では，X と Y が共に，「比較されうるターム」，「選択肢」という，同じレヴェルのタームであったのに対し，「起点」用法では，X と Y は，X は起点，Y は述語によって表される事態という異なるレヴェルにある。

前者の用法においては，それと同じレヴェルにある Y との関連において，X を「越えられるターム」と解釈していたが，「起点」用法においては，動詞が表す事態 Y との関連において，X を「越えられるターム」と解釈することになる。

本稿では，「起点」用法の「より」は，X を，Y で表された新しい局面

---

(16)　ここでは，「比較」，「選択」用法を説明する際に用いた「より」の仮説が，「起点」用法ではどのように解釈できるのかを説明することにとどめ，網羅的な記述は行わない。

に対して（つまり新しい局面から見て），「越えられたターム」（最初の局面）と解釈すると考える[17]。「より」は，「移動」，「変化」，「選択」などの意味を表す動詞と共起することが観察されるが，これらの動詞も，共通して，ある新しい局面への移行という意味を持つため，「より」が持つ「超越」の機能と親和性があると言える。

文脈によって，「越えられたターム」（最初の局面）は様々な解釈を受ける。以下，いくつかの例を分析する。

（15）　船が横浜港より出航する。　（『明鏡』）
（16）　学友会より寄贈された。　（『明鏡』）
（17）　選択肢より正解を１つ選べ。（作例）

（15）において，動詞「出航する」は，「船が港を出ること」であり，それは，港（X）にいた船が，その外部である海へと移動することを意味する。「より」は，Y（船が海にいること）という局面に対して，X を「越えられるターム」と規定する。つまり，X は，船が移動後にいる場所である海との関係で，「移動前にいた場所」と解釈されることになる。その意味で，「横浜港」（X）は，移動の起点である。

（16）では，「移動」ではなく，「提供」の意味を表す「寄贈」という動詞が使われているが，（15）と同様に分析できる。「寄贈する」は，「公共の機関などに物品を送り与えること」（『明鏡』）を意味する。「寄贈する」

---

⑰ 「比較・選択」の用法においては，２つのターム X と Y（比較されうるターム／選択肢）の間の，ある特性や優先性という度合いの問題であったため，X を Y に「越えられるターム」として記述することには問題がない。しかし，ここでは２つのターム X と Y は，度合いにおいての優劣関係には置かれておらず，意味的には，移行関係に置かれた２つの局面と解釈できると思われる。以上のような理由から，「起点」用法においては，「超越」という意味は，局面 X から局面 Y への移行と解釈する。X が Y の「起点」であるとすれば，それは，X は Y に対して，最初の局面という意味においてである。

（Y）という事態を通じて，寄贈物がそれを受理する人の手に渡るが，「学友会」（X）は，寄贈物が元々位置づけられていた所有者であるという意味で，「越えられるターム」であり，寄贈者（起点の動作主）である。

（17）において，「選ぶ」は，要素の集合から，１つの要素を抽出することを意味する。「X が越えられるターム」であるとは，X が「正解」として抽出される（Y）以前に属していた選択肢の集合，と解釈できる。

「より」が以上のような「移行」を表す動詞と共起しない場合，「より」自体が，文脈との関連で「超越」という解釈を構築すると考えられる。

（18）　山中湖より富士山を望む。

この例において[18]，「より」が，X（山中湖）を，「富士山を望む」（Y）に対して，「越えられるターム（この場合は地点）」であると規定するとは，富士山の方向に向けられている観察者の視点が，山中湖を観測点としていると解釈できる。X は対象である富士山への，観察者の視点の出発する地点である。

結語

本稿では，格助詞「より」の多様な意味の中に，「X を，Y に乗り越えられるタームとして規定する」という統一的操作を仮定し，「比較」，「選択」，「起点」などの多様な意味はこの操作と「より」の出現環境の相互作用から構築されていることを示した。

すなわち「X が Y に乗り越えられる」ことは，「比較」では「ある特性の度合いにおいて Y が X を上回る」こと，「選択」では「Y が X よりも優先的に選択される」ことである。最後の「起点」用法では，X は，Y によって表される事態に対して，様々な意味で，「最初の局面」という解釈

⒅　このタイプの例は，通常，写真などのキャプションや，メモ書きのような短い文章の中にしか現れず，発話状況を再構成するのが困難である。

を受ける。以上のように，それぞれのケースで「Ｙによる Ｘの超越」の現れ方が異なっている[19]。

参考文献

我妻多賀子（1968）:「助詞「より」の通時的考察」,『研究年報』, 14, 學習院大學文學部, pp. 129-150。
芦野文武・伊藤達也（2019）:「現代日本語における格助詞「で」の多義性の理解に向けて」,『言語・文化・コミュニケーション』, 51, 慶應義塾大学日吉紀要, pp. 105-124。
芦野文武・伊藤達也（2022a）:「現代日本語における格助詞「に」の発話意味論的記述」,『名古屋外国語大学論集』, 10, pp. 117-143。
芦野文武・伊藤達也（2022b）:「現代日本語における格助詞「から」の体系的記述に向けて」,『言語・文化・コミュニケーション』, 54, 慶應義塾大学日吉紀要, pp. 1-21。
鍵本有理（1993）:「「～より出づ」と「～を出づ」」,『國文学』, 70, pp. 97-111。
北原保雄（編）（2021）:『明鏡国語辞典　第三版』, 大修館書店。
小柳智一（2011）:「古代の助詞ヨリ類―場所格の格助詞と第１種副助詞―」, 青木博史編『日本語文法の歴史と変化』, くろしお出版, pp. 1-24。
白井純（2001）:「助詞ヨリ／カラの主格標示用法について―キリシタン文献を中心として」『国語学』, 52（３）, pp. 1-14。
夏井邦男（1984）:「格助詞「より」の接続上の問題」,『北海道教育大学紀要. 第一部. A. 人文科学編』, 34（２）, pp. 33-45。
日本語記述文法研究会（編）（2009）:『現代日本語文法２』, くろしお出版。
八亀裕美（2014）:「現代日本語における「比較」へのアプローチ」,『甲南大學紀要. 文学編』, 164, pp. 13-22。
松本昂大（2016）:「古代語の移動動詞と「起点」「経路」―今昔物語集の「より」「を」―」,『日本語の研究』, 12（４）, pp. 86-102。

---

⑲　筆者が今まで扱った格助詞「で」,「に」,「から」については，ＸとＹの関係づけの違いによって，３つの機能を区別していた。すなわち,「構築」,「特定化」,「補完」である。しかし「より」については，明確に格助詞とみなされうるのが「起点」用法のみしかなく，しかもこの用法は現代語ではほぼ生産性を失っているため，あらたまった言い方や文語の例を分類することになり，現代語の記述という本稿の趣旨から外れる。従って今回は現代語において,「より」のカテゴリーを超えた不変の部分が，どのように使用において変化するかを示すことを記述の中心とした。